

「論文の注について」

歴史学研究会編集部

以下の文章は、『歴史学研究月報』の200号(1976年8月)から211号(1977年7月)にかけて掲載された「論文の注について」(全11回)を再録したものである。復刻にあたり、横書きに統一し、また技術的な理由から下線が付されていた箇所は、すべてイタリックに変更した。その他、明らかな誤記、誤植や書式上の不統一を訂正した以外は、初出時の文章のままである。なお、筆者は当時編集長をつとめておられた富永幸生氏と、富永氏の急逝後に原稿を整理された西川正雄氏である。

目次

- 1 *ibid.* の巻
- 2 *op. cit.*, *loc. cit.* の巻
- 3 *ebenda*, *a.a.O.*, *p.*, *pp.*, *f.*, *ff.* の巻
- 4 著者名・筆者名、編者名の巻
- 5 書名・論文名・雑誌名の巻
- 6 発行データの巻
- 7 どの方式を用いるか
- 8 なぜ注をつけるか、または邦語論文の巻
- 9 略語一覧の巻
- 10 歴研方式の巻
- 11 悪例・珍例・特例の巻

1 *ibid.* の巻

論文の注記は、執筆者にも厄介な問題でしょうが、編集部もいつも悩まされる問題です。注のつけ方には種々の流儀があつて、歴研編集部が一つのやり方を執筆者に強制することはできません。しかし、一つの論文中に不統一があつたり、通常の用法と著しく異なつた流儀や誤法があつたりすると、校正担当者は大いに弱ります。基本的には、万事、筆者個人の責任の問題だと放置するわけにもいかず、かといって不適當な注記を校正の段階で全部チェックする余裕はとてもないからです。

そこで、御参考までに、しばしばぶつかる例を中心に標準的な注記について述べておこうと思います。もちろん、歴研の論文をすべてこの流儀で統一しようというのではありません。寄稿されるときに以下の点に御留意いただければ、校正担当者も大いに助かり、不

適当な注記をなくするのに役立つだろうと思われます。

ひとまず、ここでは欧語文献の引用注に限っておきます。

Ibid., *ibid.*, *Ibid.*, *ibid.*

周知のように、これはラテン語 *ibidem* の略。辞書を引くと、「同じ場所に」、「同書(章、ページなど)に」とあり、*ib.* とも略される。略号だから、必ずピリオドをつける。すぐ前に引用したものにつづいて引用する場合に用い、普通、「同上書」、「同論文」を意味するとされる。だが、実際の用法はもっと広い。つまり、すぐ前に引用した「著者、著作物、未刊行史料、新聞・雑誌、発行所、発行年、巻数・号数、ページ数など」のデータ全部または一部を意味する。ただし、たとえば著者だけを指すことはないので、K. Marx, *Der achtzehnte Brumaire des Louis Bonaparte* を引用したすぐ後で、*Ibid.*, *Das Kapital* などと書くと噴飯のものであろう。他方、同じ雑誌などに載った別の筆者の論文をすぐ続いて引くとき、筆者・論文名の後に、雑誌名を *ibid.* であらわすことはよくある。たとえば、K. Kautsky, „Der Entwurf des neuen Parteiprogramms”, *Die Neue Zeit*, XII,... のあとに、E. Bernstein, „Probleme des Sozialismus...”, *ibid.*, CLX,... とするような場合。

いずれにせよ、この略号を用いる本来の目的は、繰り返しを避けることであるから、すぐ前のデータと重複するところはすべて省略するのが本筋であり、それで誤解されることもないはずである。だから、たとえ同一著者のいくつかの書物を引用する場合であっても、著者名と重ねて、たとえば、M. Weber *ibid.* などとするのは——よく見かける例だが——奇妙であり不経済である。この点は、*op. cit.* の用法とは異なる。

次に、*Ibid.* にするか *ibid.* にするか。この点はどちらの例も見うけられるが、普通は、文頭に来る場合——これが大部分だが——前者のように大文字ではじめ、文中に用いるときは後者のように小文字ではじめるのが多いようである。

理屈を言いだすときりがないが、これより面倒なのは、*Ibid.* にするか、*Ibid.* にするかである。つまり、イタリクスにすべきか、それともローマン体のままでよいのか。英語文献などでは、これはラテン語である(すなわち自国語でない)との理由からだろうが、イタリクスにする例が多いようだ。この理由からだと、われわれの日本語論文では、イタリクスにすべきだということになる。だが、横文字はすべてどのみち外国語であり、これだけ特別扱いする理由もない。また、欧語文献にも——すでに自国語化したとの前提からだろうか——ローマン体で用いられる例は決して少なくない。結局、われわれの場合も、どちらの様式でもよいということになるが、ただ、書籍、雑誌、新聞などのタイトルをイタリクスにする流儀の注記をすぐする場合には、*Ibid.* もイタリクスにする方が整合的かもしれ

ない。

ところで、*ibid.* が英語やラテン系言語の文献で用いられるのは普通だが、ドイツ語やロシア語文献では用いられないのが通例である。それかあらぬか、英独の文献が多用されるわが国ではしばしば用法に混同がみられる。

2 *op. cit.*, *loc. cit.* の巻

op. cit. がラテン語 *opere citato* の略であるのはよく知られている。だが、これは「引用した著作のなかに」つまり「前(上)掲書中に」の意であるから、*ibid.* とは異なり、前回の引用にすぐ続かず、その間に他の著作の引用がある場合に用いられ、著者名の後に記される。

(1) Edward Hallett Carr, *What Is History?* (London, 1961), p. 32.

(2) A.J.P. Taylor, *English History 1914–1945* (Oxford, 1965), p. 48.

(3) John W. Wheeler-Bennett, *The Nemesis of Power: The German Army in Politics 1918-1945* (London, 1953), p. 96.

(4) Carr, *op. cit.*, p. 64.

右の(4)は(1)の書物の 72 ページを意味するが、著者名は特別な場合を除き姓のみを書く。

op. cit. に似ているようで明確に用法の異なるものに *loc. cit.* がある。これもやはりラテン語であり *loco citato* (「引用した場所に」の意)の略である。ときに *l.c.* と略されたり、*l.s.c.* [= *loco supra citato* (「上に引用した場所に」の意)の略]が使われたりする。この用法はやや複雑で二種類ある。

(a) 前に引用した著作の最後の引用箇処と全く同じ箇処を指す場合。

(5) Taylor, *loc. cit.*

これは(2)のテイラーの書の 48 ページを指す。〔前の例(4)がかりに Carr, *loc. cit.* とあれば、(1)と同じく 32 ページの意である〕。

(b) 前に引用した雑誌論文・史料集・未刊行史料などを繰り返し引用するときのように、*op. cit.* (「引用した著作に」とするより、*loc. cit.* (「引用した場所に」とする方が適切であるような場合に用いる。

(6) George Macklin Wolson, “A New Look at the Problem of ‘Japanese Fascism’”, *Comparative Studies in Society and History*, X (1968), pp. 401–412.

(7) Woodrow Wilson Papers (Library of Congress, Washington, D.C.), II-151.

(8) Wilson, *loc. cit.*, p. 411.

(9) Wilson Papers, *loc. cit.*, III-123.

右の例でわかるように、(a)では著者名と *loc. cit.* だけを書くが、(b)ではさらにページ数、未刊行史料の場合は箱やファイル番号、マイクロフィルムのコマ番号をつけたりする。

op. cit. も *loc. cit.* も前回の引用との間に他の注がはいっていて *ibid.* が使えない場合のものである。ところが、*op. cit.* は同一著者の二つ以上の著作をすでに引用してしまったときにはもはや使えないことになる。そのような場合には、かわりに簡略化した書名を用いたりする。だから、書名まで書いてその後に *op. cit.* をつけたりするのは、ときおり見かけるが、無駄というより間違いである。他方、*loc. cit.* は、同一著者の二つ以上の著作がすでに引用してあっても、最後に引用したのと全く同じ簡処を示す場合には、なんども用いることができる。そうは言っても、最後の引用がはるかに前のことで相当かけ離れていると、探すのに厄介である。なんのために注をつけ、なんのために略号を使うのかを考えれば、*op. cit.* や *loc. cit.* の用法は必ずしも実際的でないことが多い。

(10) John W. Wheeler-Bennett, *Brest-Litovsk: The Forgotten Peace, March 1918* (London, 1938), p. 128.

(11) Edward Hallett Carr, *The Bolshevik Revolution 1917–1923*, III (London, 1961), p. 512.

(12) Wheeler-Bennett, *Nemesis of Power*, p. 256.

(13) Carr, *loc. cit.* [(11)の書の同ページの意であって、(1)や(4)のそれではない。また、Carr, *Bolshevik Revolution, op. cit.*, p. 384. などは誤り]

以上の用法は、実際の著書や論文では案外に注意されておらず、欧語文献にもしばしば混乱がある。わが国の文献で *loc. cit.* を *op. cit.* や *ibid.* と同じ意味に用いている例は決して少なくない。一知半解な使い方をするくらいなら使わぬ方がよい。実際、使わなくとも支障はないからだ。きわめて便利な *ibid.* はともかく、*op. cit.* や *loc. cit.* を用いずに簡略化した書名を繰り返す方法はある意味で合理的ですらある。

なお、*op. cit.* や *loc. cit.* をイタリクスにするかどうかは、いずれの習慣もあり、前回に説明した *ibid.* の場合と同じように考えることができる。しかし、大(頭)文字を使うかどうかは、*ibid.* と異なり著者名の後に続くのが原則であるから、普通は小文字ではじまる。ただし、本文中ですでに著作に言及しているとか、著者名の後をコンマではなく、ピリオドにする流儀の場合はその限りではない。再びただし、その場合でも、*ibid.* と同様小文字で通す方式もありえよう。

以上は主に英・仏・伊語文献の場合(イタリア語では op. cit. の代わりに cit. も使う)。だが、ドイツ語・ロシア語文献では普通ほかの用語を用いる。それについては次回に述べる。

3 ebenda, a.a.O., p., pp., f., ff. の巻

ebenda, a.a.O. など

前回までの ibid., op. cit., loc. cit. のようなラテン語は、ドイツ語やロシア語の文献でも、とくにそれが海外研究である場合は、しばしば用いられることもあるが、普通はむしろ自国語の用語を使う。

ドイツ語の ebenda は、ebd. と略すこともあり、「同じ所に」、「同書中に」の意であるから通常は ibid. と同じ用法である。loc. cit. と同じ意味では ebendort を使ったりする例もある。

次に、a.a.O. (たんに a.O. と記すこともある) は、am angeführten (angegebenen) Orte (「上述の箇處で」、「前掲書中に」の意) を略したもので、これは、ほぼ op. cit. と同じように使われる。もつとも、言葉の意味から言うと、loc. cit. も含むことになる。

(1) Karl Dietrich Bracher, *Die Auflösung der Weimarer Republik. Eine Studie zum Problem des Machtverfalls in der Demokratie* (3. Aufl.; Villingen/Schwarzwald, 1960), S. 288.

(2) Ebenda, S. 512.

(3) Arthur Rosenberg, *Die Entstehung der Deutschen Republik 1871–1918* (Berlin, 1928), S. 200.

(4) Bracher, a.a.O., S. 24.

ところが、ときとしてドイツ語文献にも a.a.O. が ibid. と ebenda が op. cit. と同じように用いられている例もなくはない。たとえば、(5) A.a.O., S. 72. [(4)の書のつもり] とか、(5) Rosenberg, ebenda, S. 96. [(3)の書のつもり] のごとき用法がそうである。あるいはまた a.a.O. を ibid. と op. cit. の両方の意に用いている場合も散見する。これらは不正確というより誤った用法と考えるべきであろう。

なお、a.a.O. は、著者名の後にコンマもピリオドもなしに続けられることも多い。たとえば、Rosenberg a.a.O., S. 192. のごとくである。また ebenda は普通文頭に来るから、Ebenda とするのが通例。

ロシア語文献では там же (「同じ所に」 = ibid.) や у автора (「上述の著作物で」 = op. cit.) を

用いる。活字の都合で例を挙げるのは割愛するが、これらはよく大文字ではじめられる。前者は文頭に來るのが普通だから当然だとして、後者もその例が多いのは、ロシア語文献では著者名のあとにコンマではなくピリオドをつける習慣があるからであろう。なお、ロシア語文献では右のような自国語とともに同一書物のなかでも、外国語文献を引用する場合、ラテン語を混用している例は普通である。引用文献によって記号を変える点わが国の事情と似ている。

ドイツ語でもロシア語でも、右の用語はそれぞれ自国語であるからイタリクスにしないのが普通である。それにそもそも書名をイタリクスにしない習慣があるから、ラテン語の *ibid.* や *op. cit.* などを使っても普通はローマン体にする。

p., pp.; f., ff.,——ページのこと

p. は英語やフランス語の *page* の略とも、ラテン語 *pagina* (イタリア語、スペイン語も綴は同じ) の略だとも考えられる。だから西洋語の文献で広く国際的にも使われるが、ドイツ語やロシア語の文献では、一般に、それぞれ自国語の *Seite* や *страница* の略である *S.* や *стр.* (もしくは *c.*) を用いる。

引用箇所が2ページ以上にわたるとき、p. は pp. となる。なぜ、複数形が、たとえば *ps.* でなくて *pp.* なのか？ これは、一般に略号の複数形は同じ文字を重ねるのが合理的で慣例となっているからであろう。いずれにせよ、次のように用いる。

pp. 32–34 (× pp. 32–4), pp. 102–105 (× pp. 102–5), pp. 150–152 (× pp. 150–2), pp. 128–256 (× pp. 128–56) 括弧内は悪例。

ところが、*S.* や *стр.* は引用ページが複数になっても変らない。*S. 24–26; стр. 48–50* のごとく書く。ドイツ語文献に *SS.* の例は皆無ではないが、まず使われることはない。しかるに、邦語文献には *Max Weber, Ibid.* のごとき類とともに *SS. 124–48* のような例がひんばんにあらわれている。さなきだに複数形を使う習慣のない日本語だ。こんな不経済な表記はやめた方がよい。

ページ数はできるだけ正確に示した方がよいに違いないが、簡単に *f.*, *ff.*, *seq.*, *seqq.* あるいは *passim* などが使われることもある。たとえば *pp. 96f.* は *pp. 96–97* の意であり、*pp. 128ff.* は *p. 129* とそれに続く複数ページを指す。*seq.* または *sq.* (ラテン語の *sequens* の略) とか、*seqq.* または *sqq.* (同じく *sequentes* の略) は、ここではそれぞれ *f.* と *ff.* の意であり、それらと同じように用いられるが、引用箇所があちらこちら、いたるところにある場合は、ラテン語 *passim* (略は *pass.*) が用いられる。*passim* や *seq.* 等は、文頭に來ること

はずないから、小文字で始まり、ラテン語だからイタリクスにすることが多い。だが、*passim* の使い方は甚だ漠然としている。英語文献などでは、たとえば、

p. 144, *passim*; pp. 144ff., *passim*; chapters 6 and 7; *passim*; *passim*, chap. 2.

という風に使われていて一定しないし、場合によっては、書名の後に、いきなり *passim* とあつたりする。また、*passim* は *et passim* とともに表記される。

ところで、pp. 144–164 と pp. 144ff., *passim* とはどの程度違うのか。前者は関係箇処が所与のページ内に連続して出てくるが、後者では指定ページ以降断続的に出てくる場合と考えるべきであろう。それにしても、後者をたとえば pp. 144–46, 148f., 150–64 と分解できる場合は *passim* は使うべきでないのだろうか？ 一般にそのくらい頻出すれば *passim* を使うべきなのか？ その辺はいわく言い難しである。たしかに、曖昧な引用指示はほとんど無意味になることがあるから、できるだけ避けた方がよいが、ここはどうしても *passim* でなければ、という場合もありうるものである。

4 著者名・筆者名、編者名の巻

論文の注では著者名は、西洋人の場合、ファースト・ネーム、ラスト・ネームの順に書くことが普通である。フルネームにするか、ラスト・ネーム以外はイニシアルだけにするかは、厳密に言えば、表題紙(タイトル・ページ)に記されているところに従うという約束がある。

たとえば、A.J.P. Taylor, *The Habsburg Monarchy 1809–1918* の場合は、イニシアルだけで充分であり、彼のフルネーム Alan John Percival Taylor,——と書く必要はない。ところが、Edward Hallet Carr, *Socialism in One Country* であつて、E.H. Carr,——ではない。いずれもこれらの本の表題紙がそうなっているからだ。この原則は、しかし、実際にはあまり厳守されていないようである。また、論文筆者の場合は目次などの書き方に頼らず、論文冒頭に記入されたものに従うことになっている。

筆者名の後には、普通はコンマが来る。その他、とくにロシア語やドイツ語には、ピリオド、コロン、セミコロンが来る例もある。また著者名をイタリクスにする流儀もあるが、そのときは書名の方はローマン体になる。

なお、ここで若干補足しておくが、文献目録や図書カードの表記法には論文の注の様式と異なるところもある。姓名の順も文献目録では姓を先に出す方が合理的であり、その例が多い。そのほかにも、文献目録では、著者名や書名の後はコンマではなく、ピリオドにしたり、出版データを括弧に入れられないなどの違いもあるが、ここではこれ以上触れない。

また、欧文の人名表記のなかでも、たとえば中国人や朝鮮人などの場合は、姓・名の順に書く(例：Mao Tse-tung, Kim Il-song)、日本人の名も最近はそうなることが多くなってきているが、混乱もひきおこしている。

著者名がなかったり匿名だったりする場合は、著者名や実名が確認できる限り、〔 〕内にそれを補う。

[Rosa Luxemburg], *Was ist mit Liebknecht*, o.O. 1916.

Junius [Rosa Luxemburg], *Die Krise der Sozialdemokratie*, Zürich 1916.

著者が複数の場合、たとえば、3名までは、

Branko Lazitch/Milorad M. Drachkovitch, *Lenin and the Comintern*, I (Stanford, Calif., 1972).

というふうにするが、4名以上になると、

Fritz Klein et al., *Deutschland im ersten Weltkrieg*, 3 Bde., Berlin (Ost) 1968–1969.

のごとく et al. (ラテン語の et alii [およびその他] の略) を用いる。et al. をイタリクスにすることも多い。

編者名の場合は、

S.J. Woolf (ed.), *The Nature of Fascism* (London, 1968).

とするが、原著者が編さんされた場合には、原著者名・書名・編者名の順になる。

J.R. Seeley, *The Expansion of England*, ed. John Gross (Chicago, 1971).

翻訳の場合も同様である。たとえば、

Gustav Stresemann, *His Diaries, Letters and Papers*, trans. Eric Sutton (3 vols.; London, 1935–1940).

なお、編者名の後括弧内の ed. は、editor の略で、複数形の場合は eds. とする。しかし、人名の前の ed. や trans. はそれぞれ edited by, translated by の意である。これらは ed. by とか trans. by と書かれることもある。ところで、これは英語文献での用例であって、独仏露の場合はそれぞれ hrsg. v. —, éd. par —, под ред. が使われる。なお、ドイツ語の編者 (Hrsg.) は Herausgeber の略だから頭文字を用いるが、hrsg. v. — は herausgegeben von

の意だから、文頭に来ない限り小文字ではじまる。また、前者は Hg., Hgb (ピリオドなし) と略せるし、後者はさらに hg., hgb., hgg (ピリオドなし), hrsgb. などと略される。しかし、わが国の文献でときおり見かける hrg. という略号は hergestellt (「製造された」!) の略ではあっても herausgegeben のそれではない。要注意。

同一著者の別の著書をすぐ続けて引用する場合、著者名を idem と表記することもある。

(1) Karl Marx, *Der achtzehnte Brumaire des Louis Bonaparte*.

(2) Idem, *Das Kapital*.

しかし Idem (Ibid. と混同せぬよう!) を用いるのは余り望ましくなく、このような場合には、(2) Marx, *Das Kapital* とする方がよい。なお、同一の著者を示すのに ditto や ders. もしばしば見られるが、いずれも文献目録などで用いられることがおおく、あまり論文の注では使用されない。ちなみに、前者はイタリア語の detto [「前述の」, 「上述の」] が変形した英語だが、後者はドイツ語の derselbe (「同じ者〔人〕」) の略だから、著者が女性の場合は dieselbe とすべきである。

個人名ではなく、機関や団体名を著編者名として扱うことも多い。

U.S. Department of States, *Papers Relating to the Foreign Relations of the United States: The Paris Peace Conference, 1919* (13 vols.: Washington, D.C.: U.S. Government Printing Office, 1942–47).

このような場合、(ed.) または (eds.) はつけない。

5 書名・論文名・雑誌名の巻

英語やフランス語の文献では、普通、書名をイタリクスにする。論文の場合は、掲載雑誌や収録書名をイタリクスにして、論文名そのものは引用符(“ ”)でかこむのが通例である。しかし、ドイツ語やロシア語文献では、書名と論文名を区別せず、いずれもローマン体であらわすのが伝統的である。ただ、とくにロシア語では書名などを « » や » « でかこむことも多い。なお、最近の西ドイツの文献には英語式に書名をイタリクスにしている例もよく見かける。

(1) William L. Langer, *The Diplomacy of Imperialism 1890–1902* (New York, 1935).

(2) Robert F. Wheeler, “German Women and the Communist International: The Case of the Independent Social Democrats,” *Central European History*, VIII/2 (June 1975).

(3) Jürgen Kocka: *Klassengesellschaft im Krieg 1914–1918*, Göttingen 1973.

(4) L. Trotzki, » Terrorismus und Kommunismus. Anti-Kautsky «. Hamburg 1920.

[ドイツ語文献では、著者名と書名の上に(3)のようにコロン(:)をいれることも多い。書名と発行地の間もコンマかピリオドか一定しない。]

英語文献が最も多く区別するようであるが、そこでの一般的原則として次のように言える。刊行物全体のタイトルをイタリクスにし、その構成部分のタイトルは引用符(“ ”)でかこむ。つまり、書籍、雑誌、新聞、パンフレット等々のように独立に刊行されているものはイタリクスにするが、書物の章や節のタイトル、雑誌論文、論集中の論文等のタイトルは引用符でくくる。未刊行の史料や学位論文も引用符でくくるのが建前であって、その例も少なくない。

(5) John E. Flaherty, “The Political Career of Nicolas Bukharin to 1929” (Unpublished Ph. D. Dissertation New York University, 1954).

ところが、未刊行史料(日記・手稿・手紙や文書)については、

(6) Arthur Balfour Papers, British Museum Library.

のように、イタリクスも引用符も使わない習慣がある。

書名であれ論文名であれ、タイトル表記で面倒なのはどこを頭文字(最初を大文字)にするかの問題である。最初の語を大文字ではじめるのは各国共通だが、英語文献では、そのほかにも名詞、代名詞、形容詞、副詞、動詞(つまり冠詞、接続詞、前置詞以外)と最後の語で頭文字を使うことになっている。

(7) J. C. Hopkins, *A Manual for Both Lazy and Diligent Students: How to Succeed in Your Papers Without Really Trying It* (New York, 1980).

ただし、前置詞も綴字が4つを越えると(without や during)、頭文字にするややこしい流儀もある。大文字か小文字かは、必ずしも合理的な根拠に基づいているとはいえず、たぶんスタイルの問題でもあるようだ。ただ、「図書館スタイル」と称される別の方式によれば、最初の語、固有名詞、固有の形容詞以外は全部小文字で書く。これの方が合理的であるように思われるが、注の表記では一般化していない。

次にドイツ語文献では、最初の語、すべての名詞、固有名詞の属格をなす形容詞に頭文字を用いるだけである。

(8) Eduard Bernstein, *Die Geschichte der Berliner Arbeiterbewegung. Ein Kapitel zur Geschichte der deutschen Sozialdemokratie*, 3 Bde., Berlin 1907–1910.

フランス(イタリア, スペイン)語の文献となると, 頭文字を用いるのは最初の語と固有名詞だけであるのが原則だ。

(9) F. V. A. Aulard, *Histoire politique de la Révolution française* (Paris, 1901).

しかし, 別の流儀もあって, 上のほかに文頭でなくとも, 最初に現われた名詞を頭文字にする例も多い。

(10) Annie Kriegel, *Aux Origines du communisme français* (2 tomes; Paris, 1964).

とか Robert Bigo, *Les Banques françaises au cours du XIXe siècle* (Paris, 1947). のように *Origines* や *Banques* を頭文字にする。ところが, 実際には, *Les Ecole...*, とあるかと思えば, *A l'école...* とか, *De la moralité...* となっていたりで, この流儀も厳守されていない。これも, たぶんにスタイルの問題だからであろう。いずれにせよ, 形容詞はどんな場合も小文字で書かれる。だから, たとえば, *Front Populaire* ではなく *Front populaire* となる。

ロシア語文献でも, この点はフランス語文献に準じていて, 文頭の語と固有名詞以外は小文字にするのが通例である。なお, ロシア語のイタリクス活字には筆記体の活字が使われるが, 前述のように, 普通, イタリクスは書名には使用されず, ときに著(筆)者名に用いられることがある。(ドイツ語文献も同様)

ところで, われわれが数カ国語の文献を引用する際に困るのはどの国の表記法を採用するかである。これは書名に限らず, 論文注全部にかかわることであるから, 後でまとめて検討することにするが, あらかじめ基本点だけ言っておけば, 出来る限り統一的方法を考えるべきであり, それが無理な場合にはそれぞれの国の流儀をそれぞれに用いるのも一方法である。書物や論文のタイトルの場合, 強引に統一すると無理が生ずる。たとえば, ドイツ語文献をフランス語文献なみに小文字で書いたら, ふざけているとしか思えないだろうし, また読みづらいものになってしまう。万事, 自国語の流儀に統一してしまう英語文献でも, さすがに書物のタイトルだけは——ドイツ語やフランス語などの文献に関する限り——^マ原^マ地主義をとっている。ただし, ロシア語などのキリル文字や日本語・中国語等々はラテン文字に転写(音訳)して自国語流にしてしまう。

序に言えば, 日本語文献をラテン語に転写(ローマ字化)して表記するのも実はたいへん厄介なことである。普通, フランス語文献と同様に, 文頭の字と固有名詞以外は小文字にする。

(11) Yoichi Kibata, "Igirisu no I-Shi kamei to gendaishi-kenkyū," *Rekishigakukenkū*, 439 (Dec. 1976), 66–72.

また、転写の際にヘボン式にするかどうか問題だが、句読点になると定まったルールもないので面倒このうえない。わが『歴史学研究』の裏表紙をごらんいただきたい。会誌のタイトルは、Rekishigakukenkyu と長い綴り(スペリング)だが、本会の名は、Rekishigaku Kenyukai と分離している。不統一といえば不統一だが、いずれも間違いとは断定できないし、いまさらタイトルを変更するには余りに定着(?)してしまったようだ。

6 発行データの巻

書物や雑誌などの発行に関するデータも、正式に書こうとすると大変にややこしい。最もうるさく、かつ最も多く使われているのは英語式のものである。

まず書物の場合、次の(a)-(f)までのデータをこの順序で書名にすぐつづけ、全部括弧内にいれるのが最も正式であるようだ。

- (a) 全巻数(必要な場合)
- (b) 版数(同上)
- (c) シリーズ名(ついている場合)
- (d) 発行(出版)地
- (e) 発行所(出版社)
- (f) 発行年

Olga Hess Gankin/H.H. Fischer, *The Bolsheviks and the World War: The Origin of the Third International* (“The Hoover Library on War, Revolution, and Peace Publication,” No. 15; Standford, Calif.: Stanford University Press, 1940), p. 128.

この例の場合、第1巻であり初版であるから、(a)、(b)はない。(c)のシリーズ名は引用符(“ ”)でかこみ、番号があればそれも併記するが、その間にはコンマを入れる。なお、一般に、どういう訳か、コンマは引用符の内側にくるのが普通(“ ,” No. 15)。シリーズ名のつぎはセミコロン (;), 発行地, コロン (:), 発行所(出版社), コンマ (,), 発行年の順序で続く。

(a)の発行地が表紙紙(タイトルページ)にいくつも書かれているときは、特別必要な場合を除いて、最初のをあげておけばよい。また、アメリカの場合だが、都市名だけだと誤解されそうなときは州名も併記する。例えば、Standord, Calif. とか、Cambridge, Mass. のようにカリフォルニア、マサチューセッツなどの州名を書いておく。(e)の発行所は表紙紙のものを書く。これは、大抵の場合、省略されているが、そのときは発行地とその次の発行年の間はコロンではなくコンマになる。

(f)の発行年が表紙紙に見当たらない場合は、その裏の著作権(©の印)設定の年を使う(正式にはその場合“c.”を記入するのだそうだが、実際にはそのような例はあまり見かけない)。発行年が書物に印刷されていない場合は、図書館の目録カードで調べて〔 〕内に補うか、そこにもない場合は、n.d.(= no date)とする。ほかの材料から、かなり確かな推測ができたときにだけ、[1933?]のように疑問符をつけて補うべきである。なお、発行地不明の場合はn.p.(= no place)を使い、補う場合は発行年と同じようにする。

(a)の巻数や(b)の版数が必要な場合は、それに関連して発行年も複雑になることが多く、面倒なこともおこる。

H. W. V. Temperley (ed.), *A History of the Peace Conference of Paris* (6 vols.; London: Frowdy, Hodder and Stoughton, 1920–24), vol. II, p. 144.

この例は、全部で6巻あり、それは1920–24年に発行されたものであること、引用したのは第2巻からであることを示している。因みに、全6巻は6 vols. とし、vols. 6 とか VI vols. とはしないが、第2巻は Vol. II とか、たんに II とされる。文献リストなどでならともかく、論文注では上の例のように発行データを全部書くことは稀であって、普通は、簡単に (London, 1920–24), II, p. 144 とするか II (London 1921), p. 144 とする。後者は第2巻の発行が1921年であることを示す。

以上からわかるように、引用した巻を指示するときは、それを括弧の外に出すのである。ただし、たとえば、VI (London, 1924), VI は、全巻とも1924年刊であることを意味する。この相異はたいへん紛らわしい。

改訂版とか復刻版などの発行データは、1st ed. とか 2nd ed., rev. とか 3rd ed., rev. & enl. とか、あるいは reprint というふうに表示する。

次に雑誌や新聞の場合。

The American Historical Review, LXXV/I (Oct., 1969), p. 72.

この例のように、巻数を大文字のローマ数字(いわゆる時計数字)であらわし、号数をアラビア数字にして斜線で区切ることもあれば、Vol. LXXV, No. I のようにするやり方もある。巻数を欠く雑誌は、号数だけをアラビア数字でつける。括弧のなかに発行年月を追加するのが普通だが、号数が同時に発行月を示していたり、巻ごとに通し番号がついているときは発行年だけにすることもある。いずれにせよ、発行年は省かぬ方がよい。たしかに発行年がなくても巻と号さえわかれば、所望する論文を検索することはできる。だが、歴史学の論文でありながら、該当論文がいつ発表されたのか読むものにすぐには分らぬよう

な引用の仕方はどうであろうか。

半月刊・週刊誌や新聞などでは、通常、巻や号数を省略し日付だけを示す。その場合、括弧にも入れない。

Newsweek, Nov. 22, 1963, pp. 32–48.

新聞の場合は、さらに次のような慣習がある。*New York Times* のようにタイトルそのものが有名な・周知な地名を示している場合はその必要もないが、そうでない場合は括弧で発行地を付記する。例えば、*Christian Science Monitor* (Boston), あるいは *San Rafael Independent* (California)——市名が知られていない——のような場合。さらに、地名はイタリクスにしないで、例えば、*New York Times* とするような流儀もあるが、面倒でかえって誤解を招きやすいのでやめた方がよいと思われる。また、新聞によっては1日分だけで120ページもあつたりするから、そんなときは、*New York Times*, Nov. 23, 1963, Sec. 4, p. 1Rのごとく記事の参照箇所(セクション4, 1ページ右欄)あるいは必要なら朝刊・夕刊の別を指定するのが適当なこともある。また、新聞や週刊誌の記事や解説を引用するとき、とくに必要のないかぎり、筆者・執筆者名やタイトル名は省くことが多い。

因みに、季刊・月刊の雑誌でも、新聞と同じく、誌名の冠詞を省くべきだとする説もあるが、あまり感心しない。ただ、*New York Times* のように、誌名の *The* を省いて引用するのがほとんど定着してしまっている場合もある。

論文の注では発行データを括弧のなかに入れてしまうが、文献目録ではそうはしない。論文注で読者に直接示すべきものは著者名・書名・ページ数などであつて、出版に関する詳細なデータは二義的なものだという建前があるからだが、そうだとすれば、前述の(a)–(f)をもれなく書き入れる必要性はそれだけ減少することになる。実際の例でも、(c), (e)はほとんど省かれるし、(a), (b)もとくに必要な場合に限られているようだ。

以上は英語文献の場合だが、発行データに関しても各国の流儀は例によってまちまちである。独仏露語の文献では、そもそも括弧を使わず——それだけに簡単に発行地・年だけの場合が多い——、ドイツ語では発行地と発行年の間にコンマその他をいれないのが普通である。

Ernst Niekisch, *Hitler. Ein deutsches Verhängnis*, Berlin 1932.

ロシア語文献では巻数のかわりに年号を号数と組み合わせて用いている。

« Вопросы истории КПСС », 1962, № 4.

巻数・号数・版数などを示す略号、年月日の表記と順序など、当然のことながら、各国

によって異なるし、大文字・小文字の別もある。この説明は、かえって煩雑になるので、後ほどかかげる予定の略号一覧表を参照していただきたい。

7 どの方式を用いるか

この欄で最初から述べたきたように、注の書き方には実にさまざまの流儀がある。国によっても異なれば、同じ国でも用法は区々である。だから(1)の冒頭でも、歴研編集部が執筆者に1つのやり方を強制することはできない、と書いたのだった。各執筆者がそれなりの根拠があって独自の流儀を固執する場合も予想できるし、分野や国によってさまざまのケースがでてきて1つの流儀で統一することがほとんど不可能になることも想定できるからである。実際、初回から本欄を読んできた人——もしいたとすれば——は、おそらく、種々の用法にかえって混乱し、困惑されたであろう。それでもこれまで述べてきたことは、最初に断ったように、欧語論文に限ったもので、それも英独仏語の例やせいぜい露伊西語に言及したにすぎない。ところが、その間本誌に掲載された論文だけでも、横文字の注としてすでにフィンランド語、ルーマニア語、モンゴル語、ヴェトナム語のものがあり、今後さらに、わが国に研究分野の広がり具合からみて、本誌にもハンガリー語、ポーランド語(その他スラブ系言語)、アラビア語、トルコ語等々の論文注もあらわれるにちがいない。それぞれが³原⁴地主義をとるなら、ますます多種多様な方式がでてくる可能性があって、いよいよ人を戸惑わせるであろう。たしかに1つの方式を「強制」することも、それに完全に「統一」することも不可能ではあるが、統一できるところはできるだけ統一し、簡潔な、いわば歴研方式というべき流儀を提案しておきたい。

まず、どの方式を用いるにせよ、一貫性を保つことが大切である。一貫性さえあれば、原則的には、どの方式でもよいわけだが、論文注の本来の目的からして、煩雑で紛らわしく、分かりにくくて誤解を招くようなものであっては困る。いままで述べたフォーマルな形を全部一貫して用いるのは煩雑すぎるし、必要でもない。できるだけ簡潔に、しかも明瞭にすることが重要であり、一貫性とはそのためにこそ必要なのである。

初出の文献。原則として、なるべくデータを詳しく完全にする。だが、そうはいっても、むやみに詳しいのは煩雑にすぎない。書名はイタリクスにし、雑誌論文は引用符でかこむ。この方がはっきり区別でき見やすいし、紛れも防げるからである。発行データは括弧でかこまない。歴史学の論文注では、文献のシリーズ名や出版社名は、特別に必要な場合を除いて一般に省略する。ただし、邦語文献では発行地より出版社名を書く。

2回目からの引用。できるだけ簡略化する。著者名は、支障のないかぎり、姓だけでよい。そして続く書名・論文名(タイトル)は省略して、いきなりページ数などをかく(*op. cit.*

は使わない)。同一著者の複数の書物などを引用する場合は、それでは困るが、そのときはタイトルの略記を用いる。その略記のし方は、書物相互の区別ができると同時に、略記されたもの自体がある程度もとの書名を思い出させる程度のものであるのが望ましい。例えば、William L. Langer の *The Franco-Russian Alliance 1890–1894*, Cambridge, Mass. 1929 と *European Alliances and Alignments 1871–1890*, New York 1931 とを引用するとき、それぞれ Langer, *FRA* とか Langer, *EAA* というように略号化してしまうのは感心しない。せめて *Franco-Russian Alliance* と *European Alliances* くらいにした方がよろしい。このような場合は、「以下…と略記」と断わるまでもなるまい。もとのタイトルがそれほど長くないときは、あえて略記することもあるまい。

ただし、史料集など編者名で代表させるのが必ずしも適当でなく、しかも長いタイトルで繰り返し引用する場合とか、マルクス・エンゲルス著作集や全集のごとく略号 (MEW とか MEGA) が定着している場合には——「古典」の引用方法については別にルールがあり後で述べる——思いきった略号を使うのも合理的だ。ただ、イギリス外交文書集やアメリカ外交文書集の *Documents on British Foreign Policy 1919–1939* や *Papers Relating to the Foreign Relations of the United States* を *DBFP* とか *PRFR* とかの略号にするのも経済的ではあろうが、それぞれ *British Documents* とか *U. S. Foreign Relations* というような略記の方が一目瞭然であろう。簡略化しすぎると、分かりにくくなるし、さして手間が省けるわけでもなく、また意外にスペースの節約にもならないものである。

初出・再出にかかわらず、省ける略号は省く。巻・号数、ページ数の略号は省略する。たとえば、第3巻2号、96ページは III/2, 96 と表記する。こうすることによって、数カ国語の文献を引用する際、ここでは Vol. や p. あちらでは Bd. や S. とか Том. とか стр. というように、いちいち区別しないで済む。それに、ばらばらで不統一だと、書くのも面倒だし、間違いやすくなる。

その他の略号については、統一性を尊重する意味では、できるだけラテン語のものやかなり国際的に流布している記号を使うのが一案である。たとえば、ebenda や там же の代りに *ibid.* を使う。そして、区別するためラテン語はイタリクスにする。実際、われわれの邦語論文のなかで記号や略号でもないドイツ語の副詞 ebenda を使うのは、Dazu siehe auch Weber, 22ff., bes. 26 (「この点については Weber, 24ff., とくに 26 を見よ」といった表記と同様、本来なまなましい唐突な感じのものなのかも知れない。

ラテン語を用いるといっても、邦語文献を *ibid.* でうけたり、「拙論 *op. cit.*」などとやるのは——どのみち *op. cit.* は使わないよう提案しているのだが——いささか珍妙である。

再三繰り返すように、欧語文献だけでも完全な統一は不可能だ。このうえ邦語文献まで

含めて考えると、いっそう不統一にならざるをえない。そこで、邦語と欧語の文献は最初から截然と区別して考えた方がよい。邦語文献については、別に考えるべきだが、例えば書籍の発行地ではなく出版社だけを書くわが国の習慣は充分に理由のあるところだろう。それに、日本語は活字を縦にも横にも組める。しかも横文字を縦組の活字のなかに横に置いて縦に読ませるといふ、横文字世界の人間からすれば曲芸に近いことを日常的にやっているのだから、実に様々の複雑な場合がでてくるわけである。それだけに、われわれは独自の、しかも簡潔な方式をつくるのが要請されるのである。

欧語の文献をみると、原則として自国流(それも様々あるが、ともかく自国流)の方式を用いている。ドイツ史に関する英語文献に *ebenda* や *a.a.O.* が使われることはまずありえないし、アメリカ史に関するものであってもドイツ語で書かれた文献であれば、*Vol.* や *ed.* や *p.* がでてくることはない。自国語におきかえてしまうのが原則だ。もちろん、国際的な論集などでは、たとえ同一言語で書かれていても、しばしばさまざまの方式が同居していることもある。それでも、同じ横文字同士だから、様になっているけれど、和洋混用の場合はとかく奇妙な例が生まれる。本来、略号などはすべて日本語を使えば筋も通るし、かなり統一もとれる。ただ、横文字の間に日本語を入れるのは、とくに縦組の印刷の場合、どうにも釣合が悪いのである。

ただ、年月日の表示については、いわば和式を考えることができる。雑誌の巻・号数のあとに年月を、新聞などでは年月日を記入する場合、いつも *Feb. 1977* とか *Feb. 1, 1977* のように英語式を用いることは、不適當なこともあるし、*1. 2. 1977* (ドイツ語式) のようにすると2月1日、1月2日か紛らわしい。そこで月をローマ数字 (*I, II, ...XII*) であらわし、年月日の順序は日本語のそれに従う (*1977. II. 1*)。

さて、細かな特殊な例になると、結局はケース・バイ・ケースに各自で工夫せざるをえないこともでてくる。そのときにも基準となるのは、一貫性、簡潔、明瞭さである。このような原則に基づいて、後ほど、われわれの標準的な注のサンプルを一括して一挙に挙げることにしたい。ご用とお急ぎの方は、それだけでもお読みいただければ、さしあたりの役に立つであろう。

8 なぜ注をつけるか、または邦語論文献の巻

よく、「注を見れば論文の良し悪しがわかる」とか「論文はまず注から見ていく」と言われる。注だけみて、その論文の値打に最終的判断を下せるとは思わないが、どんな史料や文献をどのように使うかは歴史の論文にとって決定的に重要であり、そして論文の注は

それを端的に表現すべき性質のものである。その意味では、やはり「注をみれば、論文のだいたいの性格はわかる」というものである。

せつかくの優れた史料操作や文献利用であっても、それが正確に表現されないなら、画龍点睛を欠くというものだ。これまで本欄で述べてきたことは、もちろん史料批判や文献利用法に関することでもなければ、注のつけ方一般でもなかった。せいぜい注の表記、注の形式についてであった。「たかが注の形式くらいに目くじら立てることもあるまい」という意見もあるかもしれないが、残念ながら、曖昧な注の表記が実は曖昧な史料操作を物語っていることがしばしば見られるのである。

そもそも注はなぜ必要なのか、いつ、どこで、どんな注をつけるべきか、という注のつけ方一般を論ずるのは本欄の狙いではないが、注の形式も結局はそのような基本的なこととの関連で考えられねばならない。

まず、注の種類には、(a)本来の論拠(典拠)を示すためのもの、(b)補足的な説明のためのものがある¹⁾。

根拠ないし典拠の注は、同時に責任の所在を明示するためのものである。筆者が新事実や特別解釈がいかなる史料や文献にもとづいているかを明確にしてくれれば——周知の事実や異論のない解釈であれば、そもそも注をつける必要などない。にもかかわらず注がついていると筆者のお里が知れるというもの——、読者はどこに論述の根拠があり、論述がどのような性質のものであるか、つまり論述の信憑性を判断する材料をあたえられるし、責任の所在もより正確に知ることができる。もっとも、典拠を明示しさえすれば、筆者はすべての責任を免かれるというものではない。ある特定の典拠や見解を選んだ限りでの責任はもちろん残っているからだ。

補足説明の注は、行論に直接の深い関係のない場合でも読者の見解を助けたり、参考のための情報を提供するために重要であり、実際にも注の多くを占めることがある。ただ、この種の注があまりに頻出するのは感心しない。一般に注というものは読者をそこで立ち止まらせ、いささか煩わせるものだからである²⁾。

いずれの場合でも、論文が公表されるものである限り、最低限、他の研究者がその典拠に直接あたって論述の正確さを検討しうるために必要な情報を提供するものでなければならない。さらに、読者ができるだけ論拠の性質を判断しうる情報を備えておいた方がよい。たとえば、ある雑誌論文を引用する際、巻数、号数、ページ数まで明記すれば必要条件是充たされるであろうが、年号が欠けていると、読者はいつ頃の論文か見当がつけにくい(例：『歴史学研究』256, 48 というように号数とページ数だけだと、それが1961年8月号だとすぐに分る読者は稀有の存在であろう。この場合『歴史学研究』256(1961. VIII), 48 とするのがよく、せめて年号だけでもいれるべきである)。

ところが、わが国の論文の注記を見ると、不完全で不親切な例が多く、邦語文献の注記のしかたはとくに甚だしい。これは外国史関連の論文中の邦語文献もそうなのだが、やはり日本史関連のものの方がどうしても目立つことになる。この傾向は前近代史の論文の方が顕著であるようだ。依拠すべき史料や史料集にいわゆる古典や初学者にも周知の基本的なものが多いせいか、史料や史料集について発行データや所蔵場所をいっさい示さないのはむしろ通例のようである。『大日本古文書』とか『大日本史料』などなら、いきなり巻数・ページ数を挙げればよいかもしれないが、『平安遺文』とか『鎌倉遺文』になると前後になにも付さなくてもよいものであろうか。それはまだしも、研究書についても発行データをいっさい示さない例がきわめて多いのである。最近の日本近現代史関係の論文には、この点、発行所・発行年をつける傾向も多くなっているが、まだまだ不完全・不統一・不適當である。

注だけが立派で中味のお粗末な論文というものはまずあるまいと思うが、困ったことには、注記は惨めなほど不適當なのに、ときに優れた内容の論文がある。だから、「たかが注なんて」という意識もなかなか消えないのであろう。特定の研究者だけの問題ではないので具体的に名を挙げることは控えるが、優れた著作のなかにも引用史料や文献の発行データや所蔵場所には全くふれず、あるいは刊行物か未刊行史料かの区別も定かでない注記が少くない。みずから論述を検証しようとする後学のものにはたいへん不便であり、ときには戸惑うことすらあろう。その他の読者にもより深い理解の妨げとなることが多い。おそらく著者たちは意識もしていないことであろうが、ひょっとしたら、これは、わが国における研究の秘密主義的・閉鎖的傾向、独善的な狭い専門家仲間意識のあらわれかもしれない。さらに、わが国で文献目録のついている研究書がまだまだ少ないことともこれは同根の問題であるかもしれない。文書による約束ではなく口伝えによる了解に頼る風習ができると、確実に仲間言葉、隠語の類が横行することになろう。

なぜ注をつけるのか。少し開き直って言えば、曖昧さのない史料批判のためであり、学問の民主化のためなのである。

わが国では大学などで論文注のつけ方を教授したりする習慣はなかったようである。誰も見様見真似でやってきたから、別に確立した方式というようなものはなかった。しかし、たとえばアメリカなどでは大学の教養課程あたりで論文やレポートの注記について教え込むところもあると聞く。注のつけ方に関するいろいろな方式も確立しているし、それに関する詳しい書物も沢山でて³⁾いる。だが、それらは英語論文のために書かれたものであって、そのまま邦語論文には適用できないし、その他の外国語文献についてはほとんど書かれていない。なるほど、わが国にも論文の書き方に関する書物は優に十指をこえている。ところが、注に関してはたいていお座なりに触れるだけで、しかも杜撰であるから、

ここに挙げる値打ちもない⁴⁾。

そういうわけで、わが国の注記はさまざまな国の流儀が入り混じったりして(欧語略語など)、実に多種多様、しかも前後の脈絡もなしに雑多な用例が氾濫している。欧語文献の引用例については、本欄でかなり煩雑なことも書いてきたが邦語文献の注記、具体的には日本史の研究論文についても、いろんな時代や分野の用例を検討してある方式を確立すべきである。中国史についても同様であろう。ここではその余裕がないので、邦語文献の引用注について、最低限必要で確実なところだけの提案を出しておこう。

邦語文献の表記

まず確認しなければならないのは、横文字の流儀をそのまま転用はできないことであり、横書きか縦書きかでも若干の違いがあることだ。ここでは横書き(横組)を中心に考える。

書名・雑誌名・論文名について。いまでも実に様々の用例がみられるが、最近では英語文献にならって書名・雑誌名を二重かぎかっこ(『 』)、論文名をかぎかっこ(「 」)、であらわす傾向にある。われわれもこの方式を採用することにしよう。この区別は、前述の欧文の場合と同様、刊行物全体のタイトルは『 』で、その構成部分は「 」でくくるというように一般化できる。未刊行の史料は一般に「 」に入れるか、その種類や整理の程度によっては何もつけないで仮のタイトルのままにしておく。

発行データについて。発行地はほとんど東京だから、むしろ発行所を書く。その次が一字あけて発行年。雑誌の巻・号はアラビア数字を用い両者をハイフンでつなぐ。雑誌の発行年だけをかっこ(パーレン)に入れる。発行年の後にコンマがきてページ数が続き最後にピリオドがくる。もろもろの数字は横書きでは和数字にせざるをえまいが、その他は縦も横もともに同じ方式が可能である。ごく普通の例として、

国際歴史学会議日本国内委員会編『日本における歴史学の発達と現状』IV 東京大学出版会 1976, 32.

本田創造「建国 200 年とアメリカ黒人——ブラック・シカゴからの手紙」『歴史学研究』439 (1976), 48-49.

巻数があれば、『史学雑誌』82-2 また 86-2 (1977), 64. のごときにする。

巻や号なども数字だけではあらわせないことがある。上巻・中巻・下巻を I・II・III とは記し難し、別巻、補巻、別冊、合併号、臨時号 etc. はそのまま表記せざるをえない。これらは書名や論文名と一緒にかぎかっこに入れないで、外に出すべきである。同様に二度目の引用以降の省略語を書名や論文名なみに『同上書』とか「前掲論文」などとやるのは、

本来の趣旨に反する。『 』や「 」の中はもとのタイトルに忠実でなければならず、変更が許されるのは原題中の和数字を洋数字(あるいはその逆)にするときとか、二度目の引用から原題の略記を使うときくらいである。

省略語としては、ほぼ *ibid.* にあたる同上書(横組), 同右(縦組), 同書——さらに、たんに同を用いることもできようが、どうも落ち着かない——, *op. cit.* にあたる前掲書, 上掲書などが使われてきている。論文についても, 同上論文をはじめ同様である。一貫性さえ保つなら, そのどれを使ってもよいが, ここでは本田前掲論文, 48. とか同上, 49. を提案しておこう。以上のように, 邦語文献では極力コンマを使用せず, ページの前で使う程度にしたい。上の例が示すように, それで混同の生ずることはないからだ。しかし, 実際にはこんなに簡単な例ばかりではない。どうしても混同を避けねばならぬときは, コンマでもナカグロ, ハイフン, かつこ等々でも——ただし一貫性をもって——使用できるが, これらは, できるだけ, 複雑なケースのために留保しておいた方がよい。また和文では一字あけることで区別する便利な方法がある。邦語文献についても後で標準的な例を一括して掲げることにする。

注

- 1) そのほか, おのれの知識を誇示したり, 論文を膨大な脚注という鎧かぶとでいかめしく見せるためのものも実際には少なくないが, その類の注はもちろんやめた方がよい。因みに, これは(b)の種類注の一例である。
- 2) たとえば, この例がそうである。おまけに本文より長い「補足説明」が頻出すると, 少々うんざりもする。
- 3) たとえば, Kate L. Thraibian, *Student's Guide for Writing College Papers*, Chicago: The University of Chicago Press 1963 や The Modern Language Association of America (6 Washington Square North, New York 3, N.Y.) でだしている *The MLA Style Sheet*, comp. by William Riley Parker, rev. ed.; New York 1963 などは本欄でもずいぶん参照した。因みに, これは本文の典拠を例示する注である。
- 4) そのうち比較的詳しいのは, シャーマン・ケント(宮崎信彦訳)『歴史研究入門——論文をどう書くか』北望社 1970 である。その本の帯(いわゆる腰巻)には「欧文資料を使って卒論を書くすべての学生に!」とあるが, 事例が不十分であるうえ, 原書は英語であるからそのまま転用できない。おまけにひどい悪訳で読みにくい。

また, 市販されているものではないが, 印刷出版研究所が全国の印刷業者むけに編集・製作している 1977 *New Printing Diary* という日記帳には, 印刷の手引きとして 60 余ページの付録があり, そこに文献表記の例が解説されている。残念ながら, そこにも誤りや不適當な例が多いのである。しかし, これは印刷現場側の不勉強というより, 研究者(原稿の書き手)側の不注意と怠慢の反映とみるべきであろう。

因みに, このような長い注は, ときたまなら許されようが, 頻出するとひんしゅくを買う類の注の一つである。

9 略語一覧の巻

前々回に述べた「歴研方式」では、多種多様な各国語の略語や略号はできるだけ省いてしまうことを提案した。それでも、現在のところ、いくつかの略語は使わざるをえない。混乱した使用法を避けるためにも、また文献を読む場合のためにも、各国略語対照表を掲げることにする。その他のラテン語で歴史書にしばしば、あるいはときどき顔を出す略語も列挙しておく。

ラテン語の場合、本来イタリクスにして使用されるべきであろうが、現在の西洋語のなかに溶け込んで熟している場合も多く、ローマン体で用いるのが普通になっている語(例えば A.D.)も少なくないし、略語であるのに省略符のピリオドを使用しないものもある。また、イタリクスにするかどうかは必ずしも一定しないのが実情であるので、ここではラテン語にもイタリクスをほどこしていない(「歴研方式」の欄のみ例外)。ただ、われわれが使用するときには、イタリクスにした方がよい。

大文字ではじまる(頭文字)かどうかは種々の流儀があることは前述した(本欄 1.2 参照)。したがって、ここでは、常に頭文字にする場合を除いてすべて小文字ではじめているが、いうまでもなく、これらも文頭に来るときは頭文字にするのが普通である。

なお、「その他」の欄は主としてイタリア語、スペイン語のいくつかの例を記入したにすぎず、ヴェトナム、フィンランド語は最近の本誌の例からとったもので、決して網羅的なものではない。

ラテン語略語一覧

- *ibid.*, *ib.* = *ibidem* 「同上書」 *vide* 「論文の注について(1)」
- *op. cit.* = *opere citato* 「前掲書(論文)」 *vide, ibid.* (2)
- *loc. cit.* = *loco citato* 「前に引いた箇処」
- *cf.* = *confer* 「比較参照せよ」
- *v.*, *vid.* = *vide* 「参照せよ」
- *idem* 「同一著者」
- *etc.* = *et cetera* 「等々, その他」
- *A.D.*, *a.D.* = *Anno Domini*, *anno Domini* 「紀元後」の意だが、元号の前にくる。“A.D. 500.” 因みに英語の *B.C.* (「紀元前」) は年号の後にくる。“500 B.C.”
- *ca.*, *c.* = *circa* 「約, およそ」。“ca. 1870.”
- *ed.cit.* = *editio citata* 「前出, 既出の版」
- *e.g.* = *exempli gratia* 「たとえば」
- *et al.* = *et alii* 「およびその他」(人について使う)

- i.e. = id est 「すなわち」
- infra 「下に, 以下に, 後出の」 “vide infra” (「下文参照, 後述のところを見よ」)。ページ数をつけることもある。
- N.B., n.b. NB, NB. = nota bene 「(次のことに)注意, 備考, 但し…」
- passim (略 pass.) 「各所に, あちこちに」。ページ数を続けて, “96, 192 et passim” のように用いることもある。Cf. Supra 「論文の注について(3)」。
- q.v. = quod vide (複 qq.v. = quae vide) 「この(これらの)項を見よ」。事(辞)典などの「見よ項目」に使う。
- r, r^o, Ro. = recto; r.f. = recto folio; f.r. = folio recto 右側(奇数)ページ, 表ページ, 紙の表側。“r”には省略符のピリオドをつけない。
- sc., scil., sciz. = scilicet 「すなわち」
- seq., sq. = sequens (複 seqq., ss. = sequentes) 「およびそれ以下」。たとえば, “1927 et seq.” のように使えるが, f. や ff. はページ数や行数に用いる。
- sic 「ママ, 原文のママ」。引用者の挿入する語だから, ブラケットに入れて用い, ときに感歎符をつけることもある。“der Graf [sic!] Trockij”
- supra 「上に, 前に, 前出の」。この用法については, vide s.v.“infra”。
- s.v. = sub verbo, sub voce 「…の語, 見出しの下に」, 「…の語, 見出しを見よ」。
- v, v^o, Vo. = verso; v.f. = verso folio; f.v. = folio verso 左側(偶数)ページ。裏ページ, 裏表紙。“r” (q.v.) の反対。
- viz = videlicet 「明らかに, 当然, つまり」。

	英語またはラテン語	フランス語	その他
48 頁 48-49 頁(48 頁以下) 128 頁-144 頁(128 頁以下)	p. 48 pp. 48-49 (pp. 48f.) pp. 128-144 (pp. 128ff.)		pág. págs. (西) s. ss. (フィン)
全 5 巻	5 vols.	5 tomes	
第 4 巻	Vol. 4	Tome 4	
第 6 巻第 4 号	Vol. 6, No. 4	Tome 6, N ^o 4	
第 3 版	3rd ed. (edn.) / edition	3 ^e ed.	
——編	ed. = editor eds. = editors ed. = edited by	ed. par	
発行地不詳	n.p. s.l. = sine loco	s.l. = sans lieu	s.l. (西)
発行年不詳	n.d. s.a. = sine anno; s.d. = sine die	s.d. = sans date	s.f. (西)

発行地・年不詳(発行地・年・所不詳)	s.l.n.d. = sine loco nec data; s.l.e.a. = sine loco et anno (s.l.a.n. = sine loco anno vel nomine)	s.l.n.d. = sans lieu ni date	
同上書(論文)	ibid.		
前掲書(論文)	op. cit.	op. cit. op.cite	obra cit. (西) mt. (フィン)
前掲箇処	loc. cit.		
比較参照せよ	cf.		cfr. (伊)
参照せよ	see vide (ラ)	voir	
同著(筆)者	ditto (英) — イギリス idem (ラ) — アメリカ		
その他	etc.		
年月日	Nov. 7. 1917 11. 7. 1917		

ドイツ語	ロシア語	N.B.	歴研方式
S. 48 S. 48–49 (S.48f.) S. 128–144 (S. 128ff.)	стр. 48 / с. 48 стр. 48–49 стр. 128–144	ドイツ語, ロシア語は 単複同形。	48 48–49 (48f.) 128–144 (128ff.)
5 Bd. Bd. 4 Bd. (Jg.) 6, H. 4	5 тома Том 4 年号, N 4	Том, N の T, N を除 き小文字, どのみち N はロシア語にあらず	IV VI/4
3. Aufl.	изд. 3		1977 ³
Hrsg. /= Herausgeber / hrsg. v. /= herausgegeben von	под. ред.		
o.O.			
o.J.			
		フランス語で発行地, 発行年が不詳の場合 は s.l.n.d.(s.d. ではない)	
ebenda (ebd.) ebendort	там же		<i>ibid.</i>

ebendort	указ. статья		
a.a.O.	указ. соч.		
a.a.O.			
vgl.			cf.
siehe (s.)	см.		vide (vid., v.)
ders. (dies.) (dass.)			idem
u.s.w	и. т. д.		etc.
7. Nov. 1917 7. 11. 1917			1917. XI. 7

10 歴研方式の巻

前回に述べた原則に従って、標準的な例を整理して一括して示すことになる。

i) 初出の場合は、可能な限りで完全なデータを挙げる。

A 書物・パンフレット・史料集など独立の刊行物全体を引用する場合

B 雑誌論文

C 新聞・週刊誌など

ii) 2回目からの引用

iii) 文献目録の表記

注の例示

(1) Edward Hallett Carr, *What Is History?*, London 1961, 32.

(2) A.J.P. Taylor, *English History 1914–1945*, Oxford 1965, 48.

(3) Branko Lazitch/Milorad M. Drachkovitch, *Lenin and the Comintern*, I, Stanford, Calif. 1972, 64.

(4) Fritz Klein *et al.*, *Deutschland im ersten Weltkrieg*, 3 Bde., Berlin (Ost) 1968–69, I, 72.

〔発行地の綴りは原地主義、つまりタイトル・ページに記載の綴りに従う。但しベルリンは例外とし、ドイツ民主共和国の首都と西ベルリンは、Berlin の後に括弧で Ost もしくは West を付して区別した方が便利であろう。〕

(5) Junius [Rosa Luxemburg], *Die Krise der Sozialdemokratie. Anhang: Leitsätze über die Aufgaben der internationalen Sozialdemokratie*, Zürich 1916, 96.

(6) [Rosa Luxemburg], *Was ist mit Liebknecht?* o.O. 1916, 3.

(7) Fritz Fischer, *Griff nach der Weltmacht. Die Kriegszielpolitik des kaiserlichen Deutschland 1914–1918*, Düsseldorf 1961 (1964³), 128.

(8) U.S. Department of State, *Papers Relating to the Foreign Relations of the United States 1918*, Supplement I, The World War, II, Washington, D.C. 1933, 256.

(9) S.J. Woolf (ed.), *The Nature of Fascism*, London 1963, 144.

- (10) J.R. Seeley, *The Expansion of England*, ed. John Gross, Chicago 1971, 24.
- (11) Gustav Stresemann, *His Diaries, Letters and Papers*, trans. Eric Sutton, 3 vols., London 1935–1940, I, 41.
- (12) Walter Markov, “Das Grabmal des Tamerlan,” *Die Weltbühne*, XXXI/42 (1976. X. 19), 1318.
- (13) Siegfried Bahne, “Zur Vorgeschichte der Volksfront,” *Zeitschrift für Politik*, VII/2 (1960), 173.
- (14) G.E. Rudé, “The Outbreak of the French Revolution,” *The New Cambridge Modern History*, VIII: *The American and French Revolutions 1763–93*, ed. A. Coodwin, Cambridge 1965, 653–679.
- Fernando de Herrera, *Relación de la guerra de Chipre*, in: *Colección de documentos inéditos para la historia de España*, Madrid 1852, XXI, 242–382.
- (15) H. Kohachiro Takahashi, “Die Meiji-Restauration in Japan und die Französische Revolution. Ein historischer Vergleich unter dem Gesichtspunkt der Agrarfrage und der Bauernbewegungen,” *Studien über die Revolution*, hrsg. v. Manfred Kossok, Berlin (Ost) 1969, 303–312.
- (16) John E. Flaherty, “The Political Career of Nicolas Bukharin to 1929,” unpublished Ph.D. dissertation, New York University 1954, 192.
- (17) *The Times*, 1963. XI. 24; *The New York Times*, 1963. Sec. 4, 1R; XI. 24, *Time*, 1963, XI. 24, 12; *New Statesman*, 1975. V. 30, 719.
- (18) *Ibid.*, 722. (前注の最後のもの、つまり *New Statesman* を指す。)
- (19) Klein *et al.*, II, 384.
- (20) *Ibid.*, III, 192.
- (21) George Rudé, “Why was there No Revolution in England in 1830 or 1848 ?” *Studien über die Revolution*, 231–244.
- (22) Albert M. Soboul, “La Révolution française dans l’histoire du monde contemporain. Etude comparative”, *ibid.*, 62–93.
- (23) V. M. Dalin, “Babeuf und der Cercle Social,” *ibid.* 108–119.
- (24) Rudé, “French Revolution,” 678f.
- (25) Rudé, “No Revolution in England,” 234ff.
- (26) *U.S. Foreign Relations. The Paris Peace Conference 1919*, Washington, D.C. 1942–1947, V, 288ff.; *U.S. Foreign Relations. Russia, 1919*, Washington, D.C. 1937, 192ff. (例 8 を参照)
- [*U.S. Foreign Relations* がすでに(8)の *Papers...United States* を簡略化したものだから、このように長く複雑なタイトルの場合は、引用の頻度と範囲によっては、さらに *F.R.*, *P.C.*, *1919* とか *F.R. Russia, 1919* と短縮するのも合理的。]
- (27) Bahne, *loc. cit.*, 173. [例(13)を参照]
- (28) Wolfgang Sauer, “National Socialism: Totalitarianism or Fascism?” *AHR*, LXXIII/2 (1967. XII), 404.
- (29) 文献目録の場合
- Carr, Edward Hallet, *What Is History?*, London 1961.
- Klein, Fritz, et al., *Deutschland im ersten Weltkrieg*, 3 Bde., Berlin (Ost) 1968.
- Markov, Walter, “Das Grabmal als Tamerlan,” *Die Weltbühne*, XXXI/42 (1976. X. 19), 1318–1320.

邦語文献の場合

- 1) 遠山茂樹『日本近代史』I, 岩波書店 1975, 209.
- 2) 鶴見祐輔『後藤新平』全4冊 後藤新平博伝記編纂会 1937-39, III.
- 3) 『江口朴郎著作集』遠山茂樹ほか編 全5巻 青木書店 1974-75, V, 233.
- 4) 『山県有朋意見書』大山梓編 原書房 1966, 343.
- 5) 外務省編『日本外交文書』1916 第2巻 外務省 1967, 45f.
- 6) H. ノーマン『日本における近代国家の成立』大窪愿二訳 岩波書店 1953, 64ff.
- 7) 遠山茂樹『福沢諭吉 思想と政治との関連』東大出版会 1970, 43-44.
- 8) 吉見義明「田中(義)内閣下の治安維持法改正問題」『歴史学研究』441(1977. 2), 3.
- 9) 有泉貞夫「民権運動崩壊後の地方政治状況——明治17~23年」『史学雑誌』84-4(1975), 2.
- 10) 犬丸義一「反ファシズム運動とその解体」『岩波講座 日本歴史』20(近代7) 岩波書店 1976, 206.
- 11) 森武麿「戦時下農村の構造変化」同書, 357-58.
- 12) 同論文, 340.
- 13) 遠山『福沢諭吉』147.
- 14) 吉見 前掲論文, 10.
- 15) 江口「日本帝国主義の国際的条件」(1962) 前掲著作集, V, 78.
- 16) 『山県意見書』344.
- 17) 田中義一書簡 寺内正毅宛 1914. VIII. 12. 「寺内文書」 315/24 国立国会図書館憲政資料室.
- 18) 『日本外交文書』1917 第2巻, 235ff.
- 19) 『朝日新聞』1977. III. 3. 朝刊

11 悪例・珍例・特例の巻

ibid. 氏いわく

ibid. は大変便利である。元来は「同じ場所」の意だが、書名・ページ数などをひっくりめて代弁してくれるからである。つまり、同じ著者の複数の著書を引用しているときでも、すぐ前のものを受けるのには *ibid.* だけでよい。

それなのにわざわざ Weber, *ibid.* とするのは悪例の一つである。他方、*ibid.* は著者名だけを受けることはないので、*ibid.*, *Histoire de la Révolution Française* とやれば間違いである。こうした悪例はあとを絶たない。極端な例では、文中で著者名を繰り返すのも省くつもりで「*ibid.* 氏によれば…」というような珍例もあるという。

ibid. が便利であるからといって、論文の読み手の立場からいうと、余り続くのは感心しない。ページをめくって注をみるたびに *ibid.* ばかりが続き、違うのは引用ページ数だけというのではうんざりする。本文に引用ページ数をいれるなり、注を纏めるなりの工夫が

必要。そこで、

ibid. も 3 度つづけば不経済 (読者は腹を立てる)。

op. cit. も不経済

たとえば K. Marx, *Das Kapital*, *op. cit.* としたら誤りである。K. Marx, *op. cit.* が正しい。しかし、もし *Das Kapital* だけを引用しているのであれば (またそうでなければ *op. cit.* は使えない)、いっそ K. Marx だけでよいのではないか。そうでなければ逆に、簡略化した形であれ書名の題名までいちいち書いた方がよい。従って、*op. cit.* は広く用いられてはいるが、考えてみると余り役に立たない。

なお、イタリアでは、

Franco Livorsi, *Amadeo Bordiga. Il pensiero e l'azione politica 1912–1970*, Roma, 1976, p. 40.

Franco De Felice, *Serrati, Bordiga, Gramsci e il problema della rivoluzione in Italia 1919–1920*, Bari, 1917, p. 129.

F. Livorsi, *Amadeo Bordiga*, cit., p. 45.

のように、「前掲」であることを *cit.* によっていちいち示す場合が多い。それはそれでよいが、この方式を日本に輸入する必要は全くないであろう。

一般に、自分の専門とする地域の方式を至上と思って猿真似する「一国史主義」の傾向が見られる。もっとも猿真似ほど忠実でないことが多いからいつそう始末が悪い。他方、頁の複数を示す *pp.* であることに引きずられてか、ドイツ語の場合にも *SS.* としたりする例もある。

孫引きの様式

今日のように複写技術が発達し、海外渡航の機会も比較的多くなると、外国史研究者といえども、入手しえない史料や文献はますます少なくなってきた。このように便利 (不便) になると、孫引きをしなければならないケースはごく少なくなった筈である。しかし、引用文献・史料すべてについて原典 (オリジナル) にあたることは事実上ほとんど不可能であるし、論文の本題にかかわる主要な史料・文献以外なら孫引きも許されるケースはたしかに存在する。

その場合、大切なことは、それが孫引きであることを明示することである。「～の引用に拠る」ということを示す方法・略号は各国語によってやはり違いがある。ここではもっとも単純な形を提案しておこう。

孫引きする史料・文献——わかる限りの場合と同じように著者名その他のデータをあげる。

次に、コンマ・*cit.in*・コロンの

依拠する文献(そこから孫引きする文献)のデータ

Karl Radek, “Die deutsch-sowjetischen Beziehungen,” *Iswestija*, 1933 VIII.6, *cit. in*:
Dietrich Moller, *Karl Radek in Deutschland*, Köln 1976, 273–274.

(終)